



上智大学
外国語学部
語劇祭

2017年12月10日(日)

10号館講堂

全編字幕付き

イスパニア語劇 『戦場のピクニック』	12:15開場 12:30開演
	ゲネプロ 12/8(金) 18:50開演
ポルトガル語劇 『マッチ売りの少年』	14:45開場 15:00開演
	ゲネプロ 12/5(火) 18:50開演
ロシア語劇 『赤紫の島』 『花嫁選び』	17:45開場 18:00開演
	ゲネプロ 12/6(水) 18:15開演
英語劇(ゲスト参加) 『An Adaptation』	10:15開場 10:30開演
	ゲネプロ 12/4(月) 19:10開演

長い旅路によせて

外国語学部語劇祭へようこそ！

舞台を観る最大の愉しみは、役と役者、原作者と演出、観客の一体化を味わうことでしょう。しかし、演劇の本当の面白さは、上演は受容をもって完結しても、役者による役のイメージ造形や観客の反応のしかたにより、毎回の上演は深化し、変幻自在だという点にあります。舞台は現実を映す鏡ではなく、現実よりリアリティの濃い「歪んだ鏡」。同じ舞台を再現する欲求が叶わないからこそ、一枚一枚の鏡に映る姿は尊いのです。

さて、今年のチームは、練習成果をどのようにこの鏡に夢幻化してくれるのでしょうか。みなさんとともに、大きな期待感を抱いて鑑賞したいと思います。

この8年、舞台のキャンバスにのべ200名が思い思いに外国語で描いたデッサンは残像を結び、いつまでもエコーします。語劇は、遠くへ旅立つ学生にとって、これからもいとおしいプラットホームであり続けるでしょう。

外国語学部長
村田 真一

El teatro en el largo camino de la vida

¡Bienvenidos al Festival de Teatro de la Facultad de Estudios Extranjeros!

El mayor deleite de ver una puesta en escena consiste en saborear la armonía producida entre el actor y su papel, entre el dramaturgo y la dirección escénica, así como entre la producción teatral y el público. Sin embargo, pienso que lo más bello del teatro está en que las representaciones se van profundizando y cobran un nuevo aspecto en cada función gracias a la evolución que experimentan los actores y las nuevas reacciones del público de cada noche. La escena no es un reflejo simple de la realidad sino una imagen reflejada en un "espejo distorsionado", que nos muestra una realidad más condensada. Una puesta en escena nunca se repite de igual manera. De ahí el valor de las imágenes que se reflejan en cada uno de tales espejos.

Estamos expectativos de ver las imágenes que reflejen cada grupo en su espejo de ensueño. Sentémonos en las butacas para acompañar en su aventura a nuestros estudiantes.

En estos ocho años de la historia de este evento, más de doscientos estudiantes experimentaron las tablas del auditorio de nuestra universidad. Los diseños escénicos creados por todos ellos siguen resonando en el espacio de sus recuerdos. El teatro en lenguas extranjeras seguirá siendo una base entrañable de su aprendizaje para los estudiantes que un día dejan su nido para volar hacia el amplio mundo.

Shinichi Murata
Decano de la Facultad de Estudios Extranjeros
Universidad Sofía

Prefácio de uma longa viagem

Bem-vindos ao Festival de Teatro da Faculdade de Estudos Estrangeiros!

O maior prazer de assistir a uma peça de teatro é apreciar os atores representando o seu papel, o autor e sua encenação e os espectadores vibrando em uníssono. Entretanto, o verdadeiro prazer deve-se ao fato de que, mesmo terminado o espetáculo, a cada apresentação haverá diferentes interpretações e transformações caleidoscópicas conforme a imagem que o ator projeta no papel e a reação dos espectadores. O teatro não é um espelho que reflete a realidade, mas sim, um “espelho retorcido” que possui uma realidade mais profunda. Justamente por não poder realizar o desejo de reproduzir a mesma peça é que a imagem refletida em cada espelho torna-se valiosa.

De que forma cada grupo apresentará o resultado dos treinos nesse mundo ilusório do espelho? Vamos todos viajar juntos nesse barco de emoções.

Os esboços desenhados no palco em língua estrangeira por mais de 200 alunos nesses oito anos resultam nas imagens que permanecem em suas memórias *ad aeternum*. O teatro em língua estrangeira continuará a ser sempre o saudoso berço dos estudantes que viajarão para distantes mundos.

Sinichi Murata
Diretor
Faculdade de Estudos Estrangeiros

В дальний путь!

Добро пожаловать на театральный фестиваль факультета иностранных языков!

Когда зритель, приходящий в театр, может почувствовать себя частью пьесы, каждой ее роли, ощутить единство с ее автором, режиссером и каждым актером, именно тогда он получает наибольшее удовольствие от спектакля. А самое интересное в театральной постановке – возможность с каждым новым представлением углублять содержание спектакля, раскрывать все новые и новые грани пьесы, основываясь на восприятии сыгранных спектаклей, реакции зрителей, изображении актерами образов персонажей. Театр – это не просто зеркало, отражающее реальность, это скорее «кривое зеркало», которое показывает реальность «более настоящей», чем она есть на самом деле. А поскольку ни один спектакль невозможно одинаково сыграть дважды, каждое такое отображение является поистине драгоценным.

Какие же изображения и образы приготовили нам в результате долгих репетиций актеры в этом году? Безусловно, их прочтения по-своему интересных пьес и ролей будут новыми и оригинальными. Хочется поскорее вместе со всеми вами увидеть долгожданные спектакли!

За 8 лет на этой сцене на разных языках звучали голоса более чем 200 студентов. Эхо их голосов с остаточным изображением персонажей, сыгранных ими, остается с нами по сей день. Надеюсь, что эти театральные подмости будут и впредь оставаться для всех занимающихся в театральном кружке студентов важной и значимой «платформой» на их долгом жизненном пути.

Декан факультета иностранных языков
Синъити Мурата



演 目

イスパニア語劇団 El Gallinero

PIC-NIC 『戦場のピクニック』

Fernando Arrabal

ポルトガル語劇団 Grupo de Teatro Brasil

O Vendedor de Fósforos 『マッチ売りの少年』

宮入 亮

ロシア語劇団 ТЕАТРАЛ

Выбор невесты 『花嫁選び』

M.クズミーン

Багровый остров 『赤紫の島』

M.ブルガーコフ

2017 年度上智大学外国語学部語劇祭

イスパニア語劇 演目

PIC-NIC

『戦場のピクニック』

原作 Fernando Arrabal

ゲネプロ:12月8日(金) 開場 18時45分 開演 18時55分

本公演:12月10日(日) 開場 12時15分 開演 12時30分

あらすじ

戦争中のある塹壕で兵士のサポは一人きりで編み物をしていた。

そんな彼のもとに両親がピクニックをしに訪ねてきた。

サポは必死に両親を帰らせようとするが彼らは聞く耳をもたない。

あきらめたサポは両親と戦争の最前線でピクニックをするのだった。

イスパニア語劇団 El Gallinero

イスパニア語劇はイスパニア語学科創設とともに1957年に誕生しました。半世紀の歴史の中では休止していた時期もあり、現在のEl Gallineroは2009年に復活したものです。私たちEl Gallineroは、演劇を通してスペイン語やスペイン語劇圏の文化に触れることを目標にしています。"gallinero"とは、〈天井桟敷〉の意味です。昔の劇場の天井に近い、いちばん安い席がある場所です。お金はないけど演劇が大好きという人たちが、合いの手を入れたり、ヤジを飛ばしながら観劇したそうです。演劇好きが作る自由な空間にあやかって私たちのグループ名に採用しました。

顧問挨拶

イスパニア語学科は、スペインの劇作家フェルナンド・アラバルの『戦場のピクニック』を上演いたします。この作品は2014年度にいちど上演したことがあります。戦場で戦う兵士のもとに両親がピクニックの用意をしてやってくるという摩訶不思議な状況下で物語が展開します。スペインの不条理劇の秀作とされる作品ですが、リアルな台詞のやり取りが続いて行きながらも、人間が自分の意思とは関係なく残酷な戦争に放り込まれてしまっているのだとの強いメッセージが浮かび上がってきます。世界中の誰もが平和を望んでいるはずなのに、今日も、今現在も、世界の多くの地域で人が戦争に巻き込まれています。

今回の舞台は、語劇団としては極限状態のなかで作り上げました。部員数は1年生1名、2年生3名のわずか4人です。これでは作品が作れないので、すでに語劇活動を卒業した4年生の先輩たちが、字幕操作、照明、小道具作成、そして衛生兵役を引き受けてくれました。先輩たちの力を借りて舞台を実現するのも、バトンを引き継ぎながら続けてきた語劇のひとつのあり方だと思います。先輩のみなさん、ありがとう！

イスパニア語学科の学生は「鬼」のしごきを受けながら、頭のなかにはいっぱいスペイン語を詰め込んでいます。ただし、なかなかそのスペイン語が外に出てきません。疑似ネイティブ体験とも言える語劇を実践すれば、もっとスペイン語が自分のものになるのになと、いつも顧問は思い続けています。

僅かな部員数で今日の舞台をどうにか形にできた精鋭4人には心からの拍手を送ります。

イスパニア語学科語劇団 El gallinero 顧問 吉川恵美子

部長挨拶

この台本は特定の年代、場所が設定されていません。そこで我々はこの作品の背景について話し合い、舞台をスペイン内戦に設定しました。原作者のアラバルはスペイン内戦の直前に生まれ、父親を内戦で亡くしています。そうした背景から舞台はスペイン内戦がふさわしいと考えました。

この戦争ではスペイン人が二つの陣営に分かれ、殺し合いました。そうした悲惨な戦争の中で親子が戦争の最前線でピクニックをするという不条理さがこの劇最大の魅力だと思います。お楽しみください。

部長 保倉 宜幸

キャスト

サポ Zapo (2年 保倉宜幸)



好きな台詞

「ごめんよ、父さん、母さん。帰っておくれよ。戦争
に来ていいのは兵士だけだよ」

Perdonadme. Os tenéis que marchar. Está
prohibido venir a la guerra si no se es soldad.

主人公。前線の監視所で一人編み物をしていたが両親が訪ねてきてしまう。

サポの父 Sr.Tepán (2年 深井司)



好きな台詞

「戦争じゃあ、なんだってありだからな」

De las guerras, es bien sabido, se puede
esperar todo.

サポの父。自慢が大好き。昔の戦争で騎馬隊に所属していた。

サポの母 Sra.Tepán (1年 相川由佳)



好きな台詞

「蓄音機にレコードをかけるわね」

Voy a poner un disco en el gramófono.

サポの母。マイペースであり人の話を聞かない。料理を作ってサポの下を訪ねる。

セポ Zepo (3年 FAN SHUIHO)



好きな台詞

「戦死した仲間に花を一輪ずつ備えていくんだ」

Doy una flor para cada compañero que muere.

敵軍の兵士。塹壕に気づかず近づいてきてしまい、捕まる。

衛生兵 Camillero (4年 村上莉奈)



好きな台詞

「死者はいるかね？」

¿Hay muertos?

死体を集めに来た衛生兵。負傷者がいないことに怒り出す。

スタッフ

顧問 吉川 恵美子 (イスパニア語学科教授)

演技・スペイン語指導 吉川 恵美子

スペイン語指導 長谷川ニナ (イスパニア語学科教授)

団体責任者 保倉 宜幸 (2年)

演出 保倉 宜幸 (2年) 深井 司 (2年)

字幕・音響操作 下脇ぼぶら (4年)

小道具・大道具・衣装 語劇部員

小道具作成協力 高橋さよ (4年) 沢田杏樹 (4年)

パンフレット作成 保倉 宜幸 (2年)

効果音作成 保倉 宜幸 (2年)

2017 年度上智大学外国語学部語劇祭
ポルトガル語劇団 演目

O vendedor de fósforos

『マッチ売りの少年』

ゲネプロ : 12/5(火) 開演 18:50

本公演 : 12/10(日) 開場 14:45 開演 15:00

部長より

Boa tarde! 今年度のポルトガル語劇団の活動は例年より遅く、7月からスタートしました。今回の舞台を務めるのは、主に1年生と2年生で観客の前に立つのは全員初めてですが、語劇祭で発表したいという熱意をもって、週末を含めほとんど毎日練習し本日を迎えております。一人ひとりが作品に対する想いをぶつけながら練習に取り組むなかで、私たち自身の成長にもつながったと確信しております。本日の発表はおおよそ4ヶ月にわたって積み重ねてきた練習の集大成です。

今年度の作品は、近年ワールドカップやオリンピックを開催し華々しく見えるブラジルのイメージとは対照的に、その下層社会に生きる子どもたちをとりあげた作品となっております。貧しいながらも、将来への夢を忘れず懸命に生きる子どもたちの姿をお届けできればと思います。最後までお楽しみいただければ幸いです。

ポルトガル語学科4年 佐久間康介

脚本家より

台本を担当させていただいた本学非常勤講師の宮入亮と申します。「マッチ売りの少年」は、私が本学の学部生だった頃に書いた作品で2006年に上演しました。今回は少し書き直しを加えての再演となります。執筆のきっかけは、ブラジルを代表する作家の一人ジョルジュ・アマードの『砂の戦士たち』を読み、ブラジルのストリートチルドレンについて知ったことでした。ブラジルにおける貧困および社会格差は、深刻で根深い問題として、今なお残っています。このような状況に対して、無関心であるわけにはいかないと、アマードをはじめ多くの作家たちは自らの筆で社会問題を明らかにしてきました。そうした偉大なる先達たちに敬意を払い、これからのブラジルに希望を託しつつ、皆様に少しでもブラジルの抱える問題を知っていただければと思います。

顧問より

この演目は、2006年に初めて学生のオリジナル脚本で上演した記念すべき作品です。当時の脚本を担当した宮入亮さんご自身の加筆修正による、満を持しての再演となりました。過酷な状況におかれた少年たちは、社会から排除されながらも、それぞれに大きな夢を描いています。彼らは人と人とのつながりの中でその温かさに触れ、何が本当の幸せなのかを少しずつ理解していきます。我々にいったい何ができるのかと考えさせられる作品です。学生たちの心のこもった演技にご注目いただければと思います。

顧問 HELENA TOIDA

キャスト紹介



Rodrigo

1年 佐藤智也

過酷な社会の中でも力強く生きるストリートチルドレンの中心的存在。



Rafael

2年 佐藤海斗

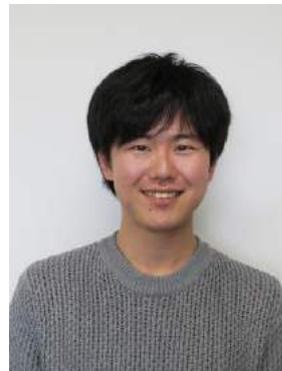
ストリートチルドレンだったハファエルがどのように変わって行くかに注目していただきたいです。



Maria

1年 塚本悠紀子

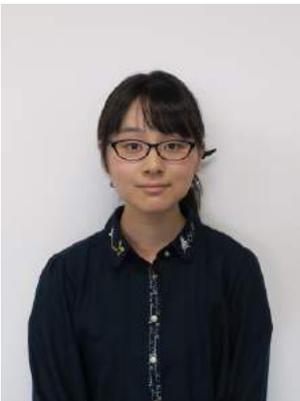
家庭内環境が原因で家出をしたが、未来に希望をもつ女の子。



Padre João/ Homen

2年 石川大雅

子供たちの成長を見守る/盗みを働く子供たちに強い恨みを抱く労働者。



Sônia

1年 後藤祐美

バールの女主人。少年たちに亡き息子の面影を重ねている。



Policial

1年 永指陽捺子

冷徹な警察官。悪役ではなく、彼なりの「事情」を持って仕事をしている。



鈴木

4年 佐久間康介

出張にやってきた日本人会社員。ブラジルの華やかな一面とその対照的な一面に刺激を受けます。



Tanaka

1年 隅田雄大

ブラジルに住んでいる日系ブラジル人で鈴木とは旧知の仲。



Narradora

4年 平澤佳奈

声の出演だけで
すが、されどナレ
ーター！！存在
感出していきます！



演 出 隅田雄大(1年)

脚本・加筆訂正 宮入亮(本学非常勤講師)

照 明 木岡由希子(5年) 隅田雄大(1年) H. Toida(顧問)

音 響 隅田雄大(1年)

背 景 石川大雅(2年) 佐藤海斗(2年)

字 幕 平澤佳奈(4年)

字幕補助 木岡由希子(5年) 佐藤智也(1年) 塚本悠紀子(1年)

大道具・小道具・衣装 語劇団メンバー

撮 影 渡部里奈(4年)

パンフレット制作 後藤祐美(1年)

チ ラ シ 制作 石川大雅(2年)

ポルトガル語劇団部長 佐久間康介(4年)

ポルトガル語指導・翻訳・顧問 H. Toida(本学教授)

O vendedor de Fósforos

マッチ売りの少年

Teatro Brasil

ポルトガル語劇団

—— 世界中の注目を浴びる美しい街、
リオデジネイロ。しかし、その華やかさの陰には
貧困に喘ぐ子どもたちがいる。

日時: 12月10日(日)

開場 14:45 開演 15:00

チケット: 12月5日(火) 18:50~

場所: 10号館講堂

全編日本語字幕つき

公式Twitter: @porugeki-sophia

ロシア語劇 TEATRAJ

2017.12.10(日)
10号館講堂

字幕付き
入場無料

開場 17:45 / 上演 18:00 / 終演 19:20 (予定)

「赤紫の島」 *Багровый остров*

М. Гинди-Эт作

「花嫁さん」 *Видюк невесты*

М. Козмин-Ав作

ゲスト公演 12.6(水)

開場 18:00 上演 18:15

終演 19:35 (予定)



上演によせて

顧問挨拶

創設 11 年目を迎えた劇団 TEATPAJI (チアトラール) が果敢に挑む作品は、M. クズミーンの『花嫁選び』(1907 年) と M. ブルガーコフの『赤紫の島』(1927 年) です。いずれも、日本ではまだなじみの薄い戯曲ですが、ロシアでは舞台作品として人気を博してきました。

『花嫁選び』は、アラビアンナイト風の舞台仕立て。真実の愛や「実体と見せかけ」をテーマに、パントマイムを中心に据え、踊りや変身、仮面や中東の音楽など、カーニバル的要素を小気味よく散りばめた一幕物です。作者クズミーンは、専ら詩人として有名ですが、音楽を専門的に学び、絵画や演劇評論にも長けており、その多方面にわたる才能を活かし、ロシア演劇に前衛の曙光が差し始めた時期に、メイエルホリドやエヴレイノフといった演出家と協働していました。みごとなロシア語で、観る者を惹きつけてやまない小品戯曲を数多く手がけた事実は、日本ではほとんど知られていませんが、今回の上演により、その豊かな創作世界の魅力の一端が伝われば幸いです。

『赤紫の島』はかなりボリュームのある作品で、時間の制約上、圧縮して舞台にのせます。芸術作品の検閲という問題が浮き彫りにされますが、ブルガーコフ自身この作品の上演許可をもらうのに一年半も待たされたうえ、生前、戯曲としての出版は認められませんでした。この作品からは、カーメルヌイ劇場の芸術監督 A. タイーロフと俳優との関係など、当時の演劇界の舞台裏も窺い知れ、演劇の巨匠ブルガーコフの諷刺やアイロニーが光ります。現実と虚構の世界の複雑な関わりを観客に深く考えさせるべく巧みに編まれた劇中劇や群衆シーンも、観劇の楽しみを倍加するでしょう。

上演にあたっては、今年もさまざまな方々にお世話になりました。とくに、丁寧に発音指導にあたられたロシア人の先生方や広報ご担当の方、同窓会のみなさまに、心から感謝の意を表します。

幕が上がります。一緒に 2 つの夢芝居に身を委ねることにしましょう。

顧問 村田 真一

座長挨拶

2017 年度のロシア語劇は、M. クズミーンの小品『花嫁選び』と M. ブルガーコフの戯曲『赤紫の島』を上演いたします。台詞が少ない『花嫁選び』を上演するにあたっては、演劇における身体の可能性を再認識させられました。そして、「動作で語り、言葉で動く」という第一目標を達成すべく、団員たちとこの難題に立ち向かいました。

一方、『赤紫の島』は検閲をテーマとした戯曲です。劇中劇の場面は、色や音楽などを活用することにより、劇中の『赤紫の島』がいかに革命的であるかを強調しています。また、ロシア語劇史上、おそらく、最も出演する団員が多いのではないかとすることも意識し、群衆としての演技に力を入れました。

最後になりますが、上演にあたり、ご多忙にもかかわらず指導してくださった先生方、練習に協力してくださった先輩方や同級生、後輩たち、そして、同窓会の皆さまはじめ、公演に足を運んでくださったすべての方々に、深く感謝申します。

2017 年度ロシア語劇 TEATPAJI 座長 明珍 奨真

『花嫁選び』 《Выбор невесты》

M. クズミン M. A. Кузмин

【あらすじ】

舞台はミルリトーンの部屋。

乙女のピペートはミルリトーンに恋をしているのだが、ミルリトーンは彼女を拒む。

パントマイム・バレエというジャンルになる 1907 年に書かれたクズミンの作品。

役者紹介



■ 清水悠佑
ミルリトーン



■ 山根大河
カデジ



■ 齋藤笑里
ピペート



■ 毛利珠子
ギュリナラ



■ 椎名基雄
トルコ人



■ 梶本明宏
トルコ人

『赤紫の島』 《Багровый остров》

М.ブルガーコフ М. А. Булгаков

【あらすじ】

物語の舞台はゲンナージイ・パンフィーロヴィチの劇場。

彼の劇場で劇作家ヴァルヴァーラ・ディモガーツカヤの新作『赤紫の島』を上演するには、検閲官サツヴァ・ルキーチの許可がある。だが、明日の昼にサツヴァはクリミアに休暇に行ってしまう。

何とか今日のゲネプロを観てもらおう約束を取り付けたゲンナージイであったが……。

検閲を正面から諷刺し、1927年に書かれたブルガーコフの作品。

役者紹介

上段：登場人物名

下段：劇中劇の役名



■森口健人
ゲンナージイ
グレナヴァン卿



■橋場りおん
ディモガーツカヤ
キリ・クキ



■川崎花
メチョールキナ
パスパルトウ



■塗谷紗季
スズダリツェフ
パガネリ



■嶋谷いづみ
リディヤ
グレナヴァン夫人



■勝又菜摘
アデライーダ
ベッツィ



■鶴岡義城
スンドウチコフ
シジ・ブジ



■東竜一
リンスキイ
リッキ・ティッキ



■城内拓実
ソコレンコ
トホンガ



■佐藤要
ボンダクレフスキイ
カイ・クム



■三又拓武
シュルコフ
ファツラ・テテ



■松下桃子
サツヴァ・ルキーチ



■竹内万喜子
研究生
島の原住民



■梶本明宏
研究生
島の原住民



■山根大河
研究生
島の原住民



■椎名基雄
研究生
島の原住民



■乾貴弘
役者
水兵



■清水悠介
役者
水兵

『赤紫の島』 登場人物表

登場人物名	劇中劇の役名
ゲンナージイ・パンフィーロヴィチ	エドワード・グレナヴァン卿
ヴァルヴァーラ・ディモガーツカヤ	キリ・クキ
メチョールキナ	パスパルトウ
スズダリツェフ・ウラジーミルスキイ	ジャック・パガネリ
リディヤ・イヴァンナ	グレナヴァン夫人
アデライーダ・カルポブナ	ベッツィ
アネムポジスト・スンドウチコフ	シジ・ブジ
アレクサンドル・リンスキイ	リッキ・ティッキ
ソコレンコ	トホンガ
ボンダクレフスキイ	カイ・クム
シュルコフ	ファッラ・テテ

Действующие лица	Действующие лица театра в театре
Геннадий Панфилович	Лорд Эдвард Гленарван
Варвара Дымогацкая	Кири-Куки
Метелкина	Паспарту
Суздальцев Владимирский	Жак Паганель
Лидия Иванна	Леди Гленарван
Аделаида Карповна	Бетси
Анемподист Сундучков	Сизи-Бузи
Александр Ринский	Ликки-Тикки
Соколенко	Тохонга
Бондаклеевский	Кай-Кум
Шурков	Фарра-Тете